世田谷村日記

石山修武

六月五日

朝、二年生レクチャー、午後一時より四年Ｍ１ゼミを済ませて、十七時のＪＡＳで帯広へ。

二年レクチャーはプログラムを変更して、サイモン・ロディアのワッツタワー、内田さんの庭、そして国分寺の岡邸に関して話した。内田さんの庭に関してはスタジオ・ヴォイスの最新号に書いているが、十五才の少女達のファッションに相通じる問題をはらんでいるのを直観している。しかし、同様の事例が展開してゆく可能性に確信が持てないでいるのも正直なところだ。

十勝へレンケラー記念塔で試みたことのひとつは、衣装的装飾の問題だろう。現場のスタッフが黒い塔に貼りつけたアルミ片が、どうしても変だと言うので、今、確認する為に飛ぼうとしているのだが、確信に満ちて大丈夫なのだ。スタッフが変です、と言ってくれなければ困るのだ、私の建築は。変です、は未知につながる。恐らく、狙い通りになりつつあるだろうと思う。黒い塔がにぶく光る断片をまとっている。歴然として装飾的断片であるのだが、その装飾は空白を埋める模様ではなく、自然の細部の奥行を人間に実感してもらう装置として働くのである。身を飾り立てるばかりではなく、それを眺め、体験する人間に、日常にただただ流れるように体験している自然に、ポッカリ穴が開いて、もう一つの自然が在ることをガイドする仕掛としての装飾である。建築的な骨格や変化しない表情だけで、それを望む事はできない。宮沢賢治が風の又三郎にまとわせたガラスのマントのような、ルイス・キャロルのアリスの国の鏡のような、それが在ることによって、空の青さや、雪の白さが、更に深く理解できるような、人間の、卑弱な視覚を増殖させるような、そんな仕掛である。

飛行機の出発がいささか遅れているので、日没前に、塔の表情をチェックするのは不可能かも知れぬが、星の光でも金属片に反射する光の感じはつかめるだろう。

しかしながら、この塔は「静けさの塔」と名付けられた楽器として設計されている事がより重要な事である。

すでに、フィンランドセンター発行の

静寂：日本―フィンランド　ＱＵＩＥＴＮＥＳＳ　ＪＡＰＡＮ　ＦＩＮＬＡＮＤ

に記した事だが、（参照）　01-03十勝へレンケラー記念塔

http://ishiyamaarchwaseda.ac.jp/www/jp/tokachi.html

この塔は視覚デザインをこえた六感七感を働かせる事で、より重要な価値が生まれるように設計されている。具体的には風や雨や雪氷によって様々な音が生み出されるようにデザインされている。その事を再確認するためにも現場へ出掛けている。スタッフにも、その事を思い出させなければならない。

十九時、飛行機は三〇分遅れで帯広着。クライアントの後藤氏、スタッフの倉本、ヒガキ空港に迎えに来てくれる。

まだ光があるので、現場に行く。月は満月だから暗くなっても姿はチェックできただろうが、光はまだ眼には充分であった。

案の定、塔は計画通り、計算通りの姿で建ち上っていた。外壁のジグゾーパヅル状のアルミ板も全く問題ない。予想通りの出来栄である。

美の規準の不思議さについて考えざるを得ない。未知のモノは

誰もが美しいとは感じないのだろうか。見慣れぬモノには誰もが通常の美を感得し得ないのか。

この塔に関しても、それが言えるのか。私にとっては計画通りの〝美〟なのに、人はそれにとまどいを感じるのであろうか。ともあれ、たった五分で十勝に来た目的は達せられたのだが、すでに帰る便もなし。スタッフの腹をいっぱいにしてあげる義務もあるから、焼肉を喰い、銀河街のそば屋で山菜を喰べ、倉本等をねぎらう。

彼等も、現場から逃げ出さずに良く辛抱していると思う。倉本はこの半年程の体験を生かして、キチンとした建築家になってくれれば良い。キチンとした建築家の条件の一つにグレードを知っている事があるのだが、この塔の現場では、全てのグレードが異常に高かったのだから、その感覚を時々、思い出してくれれば、それで良いのだ。

ヒガキはアプローチ部の施工を自分なりに良くやり遂げていた。これならば、私の狙い通りに、良い庭師として育てられそうだ。

十一時ホテルチェックイン。

六月六日

朝七時起床。ホテル内の天然アルカリ、モール温泉に入る。現場にはアトニ名程応援に寄こした方が良いかも知れない。倉本と相談してみよう。

今日は終日現場で内部仕上げのチェック、およびマンパワーの計算をして、六月中の全ての完成、というよりも第一期工事の完成に辿り着かせたい。ここまでくれば第二期アンモナイト美術館、第三期アウトサイダー自然体験館の建設に向けて努力したい。

フト、思い出したのだが、つい先だってのプノンペン・ウナロム寺院の現場で、東のストゥーパに取り付けられていた鐘がモンスーンの風でカランカランと鳴っていた。法隆寺でも何処でも日本の寺院にブラ下げられている小さな鐘が鳴るのを聴いた事がないのだが、アレは日本では装飾になっているのか。東南アジアの風の力と、日本の風の力とは差があるのか。帰京したら早速、プノンペンと十勝の風力についてデータを集めてみよう。

倉本、ヒガキと帯広市内のコーヒーショップで朝食の後、現場へ。内外を見てまわる。全てＯＫ。計算ちがいは何処にもない。アトはコチョコチョとした思い付を排除してゆけば良い。

外まわりに関して弱干の指示をしたが、もうあまり手を加えぬ方がよいのは歴然としている。

まわりは世田谷村の屋上と同じに野菜畑にするのが良い。変な芝を貼ったり、いかにもな造園デザインはしない。雨の路をサラリと作って終りにしよう。

帯広発最終便で東京へ。

夜ふけて、世田谷村に帰る。

六月七日

夕方、プノンペン・ウナロム寺院の渋井修さん世田谷村にて夕食を共にする。

六月八日

早朝、世田谷村の建具のアイデアを思い付く。忘れないようにスタッフに図面化させよう。考え付いてしまえば、なんだ、ということなのだが、そうそう思いきったアイデアは浮んでくるものではない。